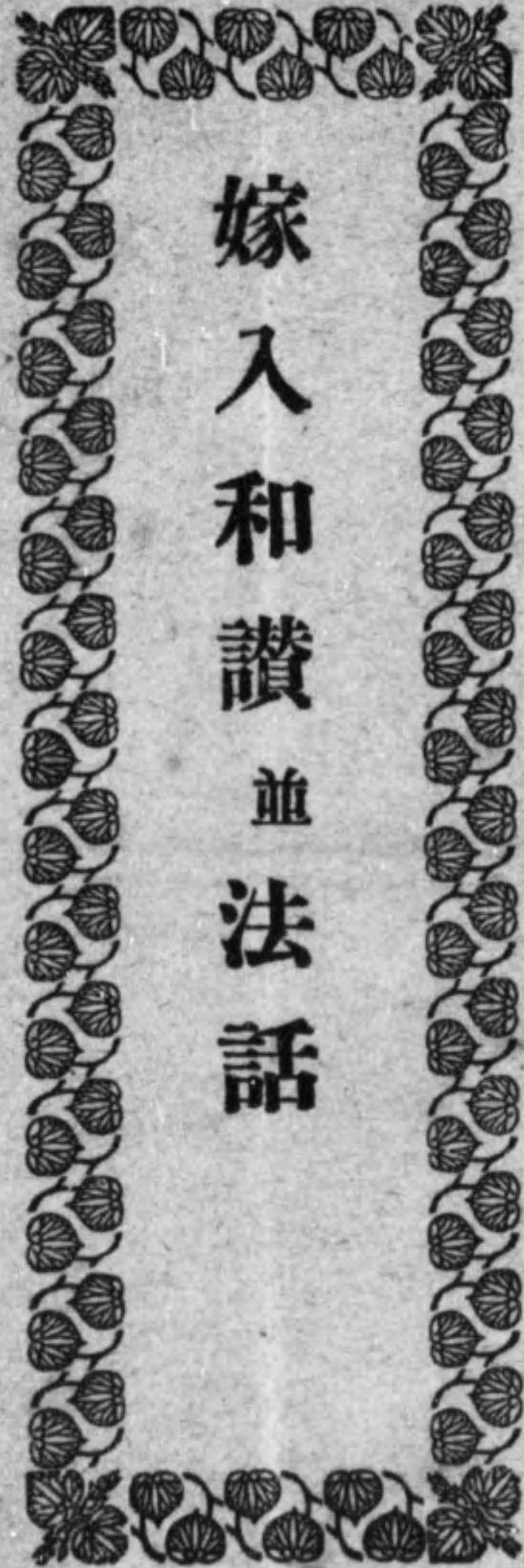


2E-59

特16  
251

216
61



嫁入和讚並法話

嫁入和讃

某

述

歸命頂禮阿彌陀尊、三世の諸佛にすぐれたる、本願成就ましくして、  
 後生三従の罪深き、悪人女人のためにとて、變女男子の願を立て、洩  
 さず救ひたまふなり、流轉生死の罪深き、つねは煩惱で胸をやき、未  
 來の事もすておきて、亂れの髪もときあげず、障りに罪か深きゆへ、  
 三世諸佛のおんそばへ、面の出されぬ女人をば、どこととりぬの御  
 慈悲やら、極樂淨土の花嫁に、むこにとるとの御本願、おんことわりも  
 立ぬゆへ、南無と一念得心の、言葉の端に御佛は、來ひよ來れの呼聲  
 は、發願回向と貰ひ受、稱我名號の廣間にて、釋迦の佛の其中に、三  
 世の諸佛のお揃ひて、三々九度の杯を、おし戴ひてありおたき、他力  
 の信心もらいうけ、一念發起のきはめうけ、南無阿彌陀佛の長持に、

蓮のひとへのゆたんかけ、變女男子の簞笥には、決定心の錠おろし、  
一心發起の上着には、歡喜踊躍の紋をつけ、佛恩報謝の合着には、憶  
念稱名の模様あり、若不生者の下着には、不取正覺の縫を付け、帯に  
は九品の紋をつけ、四十八願取揃へ、十二單衣を着飾りて、淨土へ嫁  
入の日限は、十八願と日を定め、弘誓の舟にのせられて、生死の海を  
賑やめて、十二の光明提燈で、物躰なひと思へとも、觀音勢至は先に  
たち、古佛の菩薩は後になり、上品聖者の極樂へ、あがりて蓮の縫と  
なり、彌陀の説法聽聞し、ついに淨土へ印定す

嫁入和讃終り

# 法話

今村大善口演  
雨山生速記

祖師聖人御相傳の肝要は信心一つにまぎれり之をしらざるをもて他門  
とし之をしれるをもて眞宗のしるしとすこれは五帖目第三通に御示し  
下されたる御文章の御言葉で有升此御言葉に付て御話に及ぶことぢや  
か先づこの宗旨に流れを汲たる人は必ず後生の一大事といふこと心懸  
ねばならぬ御開山九才の御時あすありと思ふ心の仇櫻夜は嵐の吹ぬも  
のかはと詠じ玉ふ其時青蓮院の慈鎮和尚も其道心の深きには驚き玉ひ  
たとある爾るに我々は一大事を忘れ名聞利養にのみふけり日送するは  
實に淺間布ことである蓮如上人は一大事を存せざるものには御逢ひあ

るまじくと仰せられて一大事を知らざるものにあふても其所詮はなひと思召ゆへ斯く仰せられるのです私に熊本監獄三池出張所の教誨を命ぜられましたから該職に従事して居りました其時囚徒に對していふには斯不自由の身となる所以は一大事といふことと心懸ぬゆへ己れの良心を昧まされたるのぢやで古人も云はれました如く過勿レ所レ憚レ改と從來の過を悔ひる良法は一大事といふ三字を終日終夜念じたなれば任運に過を悔ひ君に忠親に孝といふことと出来やうになるから是を忘れぬよふにせよと始終いふておりました又該職を辭して後本山の命を受け薩洲即ち西郷隆盛氏の生國へ布教に行きました此處でも一大事を忘れ法話千座萬座聽聞して信心を得ることは六ヶ布ゆへ此三字肝に銘して法義を聞び一番の樞要であると話したことであります近頃は筑後國

三池炭坑より二十丁計離れてある皆覺寺といふ寺院へ住して居るが先に此寺へ來ましたものは該寺の田畠等賣却し剃へ柿衣を着した様子放免の後又來寺した様子なれども有爲の檀徒本山より僧籍剝奪と相成りしもの此寺に於ては皆覺寺は勿論我々檀徒も亦一大耻辱たるのみならず僧籍剝奪のもの置ては一寺滅亡するやも計り難し故に放逐することと決し其運動により今では住職ないから迷惑不少として一寺再興と又七十有餘の老人及少女生命を全ふするとの思召を以て緇素の相談ゆへ今では此寺に住して夜學校を設け青年輩に一大事の話し致して居ること凡て物事は因縁和合せねば出来ぬものである私も皆覺寺へ住度と思ても檀徒から故障あれば行くと出来ませぬ又檀家から私へ入寺して下されといふても住寺致たき精神なくんば因縁不和合である檀家と拙僧と

和合したゆへ入寺も出来たのぢや今比叡山麓に來り一大事のこと御話  
するの亦所説と能説と和合したのであります若し私も一大事の御話  
致度と思つても皆様が聽聞して下されぬときには御話することは出来ま  
せぬ之に付て一の話が有升塚本重平氏は國會議員です此人は宗教の  
必要は元より知りたる人でありましたが然れども宗教の是非を擇ふの  
餘暇なし友人の誘引により基督教信ぜられました然るに朝鮮事件の際  
嫌疑ありて大坂市入牢の身となられたとき基督教より該教の書籍差入  
有ましたから日々聖書を閲して心を慰めおられたか何人の差入たるも  
のなるか馬鳴菩薩の大乗起信論もありましたから此書を繙かれ佛教の  
妙理を知り天主ゴッドは已も胸中妄想臆度の影子たることを了し基督  
教を捨て佛教を信せられました是も差入はありまして公平な眼で觀

ずして基督教の眼を以て見るならば矢張因縁和合は出来ませぬ此書を  
繙き佛教の妙理を知りてこそ因縁和合で有升何卒みなさんも私の話し  
と聞て信心獲得の身となられるよふ願ひます  
サテ只今讀上りました御文平く申せば御開山の御傳へ下さる要めは信心  
一であるがよ此信心を得ぬものは他宗のもの信心を得たものも眞宗の  
門徒がよといふこと又此前の御文を捧讀すれば抑も開山聖人の御一流  
にはそれ信心といふことをもて先とせられたり或は聖人一流の御勸  
化のおもむきは信心をもて本とす等又正信偈に云く正定之因唯信心或  
は速入寂靜無爲樂必以信心爲能入等とある上は信心が一番肝要なるこ  
と明かであります其信心といふ信の字は二義あります一者字彙には愨  
實也とある是は已も實にすること仁義禮智信の信と同一こと二者不疑

義是は他を信ずると唯信抄に云く信心とは深く人の言を待みて疑はざることなりと申してあります又論語に聞其言信其行あるも不疑の義である又信とは實也とあるのは能依に約し他方回向の大信なる譯を御示しなされ玉ふのである最要抄には信心をば信の心とよむ上は凡夫の迷心にあらず全く佛心よりこの佛心を凡夫に授け玉ふとき信心とはいはるゝなりとあるのは所依に約したのである一多證文には信心は如來の御誓をきゝ疑ふ心のなきなりとあるのは能依に約したのであります儒書でも五常の中で信が一番主とします今五常を四季に喩へて申せば仁は春なり木なり義は秋なり金なり禮は夏なり火なり智は冬なり水なり信は中央の土で土曜なるものは四季にありまして水でも木でも離れぬものは信であります佛教に於ても佛法の大海には信を以て能入とす

又は信は道元功德の母と申します乍然御當流に於ていふ信心は源第十八願成就の文に聞其名號信心歡喜と仰せられて第十七願に御誓ひあらせられた諸佛贊嘆の御聲よりのたのむものを助けんといふ六字の謂れを聞開き疑はなれ彌陀をたのまれたのが信心と申し升其信心といふも外にはありませぬ南無阿彌陀佛の相を心得たものも信心であるソコで蓮師は信心をとるといふも此六字の外にはあるべからざるものなりと仰せられました眞宗の大切なる三部經も六字の名號説廣げ玉ふより外はない題は一部の總標と申しまして目印である眞宗の所依たる三經の目印を伺へば佛說無量壽經佛說無量壽經卷下觀無量壽經とあります無量壽といふは漢語でありまして梵語では阿彌陀と申します阿彌陀經は梵語の儘御示あらせられたまふのです經とは支那の語なり故に三部經

も六字名號説き廣げ玉ふといふこと御分りて有ましよ其六字を平く申せば阿彌陀佛の命に歸せよといふ詞命とは我に歸せよと申すおふせで則第十八願の意今六字を分けて御話し申せば南無といふは願阿彌陀佛といふは行此願とは第十八の至心信樂欲生我國の三心至心とは偽りなき心といふこと信樂とは疑はざること欲生我國とは彌陀の極樂に生れんと欲する心此の如く三心あれとも信樂の一に攝します御文にも三信とはいへど行者たのむ歸命の一心と申されました丁度至心とは首、信樂とは胴、欲生とは足の如きもので一も欠べからざるものであります故に如來眞實清淨の三心を成就して我等衆生に施し玉ふ即三心と申しても唯是れ一心で吾人の首と胴と異なれども唯一の人身の如し畢竟衆生機發の一心は本彌陀如來五劫永劫の願心の顯るゝ所なるゆへ是れ他

力の信であります然れば今我等が歸命する念は機より成するのてはななく法より成するといふこと御分りならん今法に付て御話し申せば阿彌陀の三字の中には法身般若解脱の三徳空假中の三諦其外四智三身十力四無所畏等の一切諸佛の萬徳を兼おさめるゆへ此三字は法となり南無の二字は機となる是は一往の配當で有升再往尅すれば法に六字あり即ち阿彌陀佛に南無せよといふ彌陀の願心勅命又機にも六字有升阿彌陀に南無し奉るといふ我々の信心歸命なり此六字を蓮如上人は分り易く阿彌陀如來の仰せられけるやうは末代の凡夫罪業の我等たらんもの罪は如何ほど深くとも我を一心に頼まん衆生をば必ず救べしと仰せられたり然るに法といふものは船や車の如し我等が南無の機は残らず此阿彌陀の法の船や車にのせられて涅槃の彼岸の大陸にうつさしめ玉ふこと

我等の計り知る所ではありませぬ愈阿彌陀の不可思議の御計らひにて  
 生死の關門を押開き直に極樂世界の東門に入るのちや之を不覺轉入眞  
 如門と仰せらる次に行と云はユクともチユナフとも訓じます行といふ  
 ときは商人ならば商する商作農人ならば田畑を耕す所作船なら艦體等  
 と動す所作等を行ふといふ各自の職業を勵むこと行くと云ときは人は  
 陸を走り鳥は空に翔り船は波を蹴るなど行くといふこと各自の業を  
 勵まぬときには農人ならば穀物を得ること出來ぬ船頭なら水を渡ること  
 出來ぬ君臣の道父子の道も潔きよく守ること六ヶ布今も其如く阿彌  
 陀如來の願船にのり得なば稱名憶念も動き顯はれ恭敬拜禮の艦體も動  
 き穩に生死大海の波を超へ涅槃菩提の妙果を得ること出來ます覺如  
 上人曰く佛の正覺は我等も往生によりて成し我等も往生は佛の正覺に

よりて成するなり之を機法一体の南無阿彌陀佛と仰せられたり是が六  
 字にて助からぬと疑ふものは一切の佛法にて助からぬといふことにな  
 ることは御分りならん眞宗に御流を汲みたる人々は吾祖九十年の御苦  
 勞水泡に爲さぬやう萬事に御注意のほど望ます存覺上人は佛法王法は  
 一雙の法なり鳥の二つの翼の如し車の兩の輪の如し一もかけては不可  
 なり故に佛法を以て王法を守り王法を以て佛法をあびむと申されまし  
 た此王法とは身を修め家を齊へ國を治め天下を平にするの法である佛  
 法とは釋尊一代の説教によりて我々が妙果を開く法門のこと然るに王  
 法のこととは十八願の抑止門より出で、大經下卷の五惡段に詳に御説な  
 されました其文の中に曰く世有常道王法牢獄不肯畏慎或は不畏王法禁  
 令と依て御當流ては眞俗二諦と御立遊ばせられ玉ふも經文に明か有



まず何卒一大事の三字を忘れず未決定の人は速に六字の御謂れを聞  
き他門と云はれざるやう王法仁義の掟と相守り法義相續の肝要

明治三十三年十月十五日印刷  
同 年十月廿二日發行

京都市下京區下珠敷屋町東洞院西入  
橋町八番戸  
編輯兼印刷 西村九郎右衛門  
并發行者

京都市下京區醒ヶ井通魚棚上ル佐女  
牛井町卅二番戸  
印刷所 小林庄兵衛

堂衆立花慧明師編撰  
**當用聲明集**

折本  
鳥ノ子摺 定價金參拾錢 郵税金四錢  
目次 ○文類正信偈 ○念佛 ○三帖和讃 ○代々  
此書は大谷派本願寺當御門跡現如上人の御代  
に用ひさせたまふ聲明なり  
現今往々刊行流布するものは其多くは三四十  
年前のフシにして現代のものにあらず茲に立  
花師之を慨し在來の聲明集を改め現今御本山  
にて御依用の「フシ」を公けにせんとを計らる  
依て本館師に乞ふて茲に上梓す大方の諸賢御  
購求の上の朝夕の御勤めあらんことを望む  
易行院法海講師述

**御傳鈔講義**

正價五拾錢 郵税六錢  
夫れ宗門の末徒として宗の爲めに忠ならんと  
欲せば苟も宗祖の傳記を明らめずして可なら  
んや縱令萬卷の聖教を誦すも雖も宗祖の傳記  
事跡を明らめずんば宗祖に對し忠良あらざる  
愚の精神を開發すること能はざるなり然るに  
御傳の講義として古來刊行中未だ見るべきも  
のなし偶御傳談録ありと雖も其行跡を詳にせ  
ず義解簡略なり然るに高倉大學寮先哲に易行  
院法海講師ありて之れを講ず其遺錄世に甚稀  
なりと雖も今幸に之れを得爰に出版し廣く江  
湖の諸君に分たんと欲す今宗に忠良ならんと  
欲するの諸賢一見せしめて可あらんや乞ふ陸

續購求あらんことを  
**増補笑評破塵問對**

正價十錢 郵税二錢  
本書は夙に宗學精練の聞ある藤谷宰惠師の著  
述にして當時の宗義問題たる彼破塵問對及二  
種深信略述等を自在に破斥し其僻解たる所以  
を論定し更に異論なからしめ以て眞宗安心の  
正義を顯揚せられたり本書初版は既に盡きぬ  
依て今更に讀者諸君の便宜を計り本書に於て  
彼此所説對照し得べく破塵問對等の具辯を  
挿み且二種深信略述の論評を加へられたり希  
くは大方の諸君速に一本を購ひ其正否を知た  
まへ

**俱舍論講判**

正價五圓 郵税五拾錢  
本論は是傳瀧燈瓶の覺者世親菩薩の造本書は  
高倉の名將南條神興師の著也當論の疏書及末  
釋辨多なる汗牛充棟も當ならず然ども其論意  
を得る者殊に稀なり于茲南條講師上は四阿笈  
摩と初六足發智等より下は輓近の末釋に至る  
迄悉く涉獵して卓乎たるの眼光を以て異議百  
出粉々を擲つたるの間に聖教に則り一大斷案を  
下し初學をして岐路の鳴泣を絶たしめたり故  
に苟も常俱舍宗に意あるの士は必也當書を一  
讀せざれば盡し不可矣

和田教山校訂  
全十冊日本紙活版

同講 吉谷覺壽師撰

# 淨土三部妙典講述

大經三冊 定價金七拾五錢 郵便稅拾六錢  
 觀經二冊 定價金六拾錢 郵便稅拾貳錢  
 小經二冊 定價金五拾錢 郵便稅八錢

三部妙典は是れ淨土真宗所依の本經にして、五部妙典に其明を惟みるに如來出世の本懷、五部妙典の妙旨、諸佛の證誠護念を説き玉ふの乘齊入の妙旨、諸佛の證誠護念を説き玉ふの妙教なり、宜なる哉和漢の高僧競ふて之を翫ふもの、爲に其施す所の註解多きこと敷ふべからず、殊に淨土門中諸師の釋義及ひ吾宗先經の講解亦實に夥し、然るに或は簡に失して經意を得るに由なく、或は廣に週して却て義脈を辨へ難し、故今回本館吉谷嗣講に廣略其中を得、而も先徹の正軌に背かざるの範圍に於て三部妙典の解釋を乞へり、而るに師潔く之を諾し茲に上梓せらる、苟も淨土教の如何を知らんとするもの、殊に真宗僧徒御方は宜く座右に置き、本經の正意を誤らざることを、否自身往生の正路を過らざるを是れ努め幸に御購求を乞ふ

## 言南無者釋義

贈嗣講寶珠院丹山師著述  
 正價五拾錢 郵稅六錢

此言南無者は大心海化現の善導大師の御釋にして實に淨土真宗の骨目宗意安心の精髓なれば古より此文を釋する者尠なからず又坊間に

## 願生歸命辯

正價八錢 郵稅貳錢

本書は違安心者功存師が三業歸命を辯述せられしものにて宗意安心の囂々たる當時須く一讀を要すべき良書也

## 深廣御傳鈔說教錄

正價四拾錢 郵稅六錢

京都市下珠敷屋町東洞院西入  
 西村護法館

特16  
251

216  
61

嫁入和讃並法話

019225-000-9

特16-251

嫁入和讃並法話

今村 大善 / 述

M33.10

ABF-2817

